



イベント

南京大虐殺犠牲者国家追悼式

12月13日午前、中国南京で2024年南京大虐殺犠牲者国家追悼式を挙行了。中国共産党中央委員会政治局委員で中央宣伝部長・李書磊が出席し、スピーチを行った。

追悼式典は当館の集会広場で行われ、現場は厳かでしめやかであり、国旗を半旗に掲揚されている。10時に式典が始まり、国歌斉唱した後、参列者が南京大虐殺の犠牲者に黙祷を捧げる同時、南京市内から防空サイレンを鳴らされ、走る車は止まりながらクラクションを鳴らし、歩行者も一緒に黙祷した。その後、中国人民解放軍の16人の儀仗兵が八つの花輪を持ち上げ、壇上まで運んで献花した。

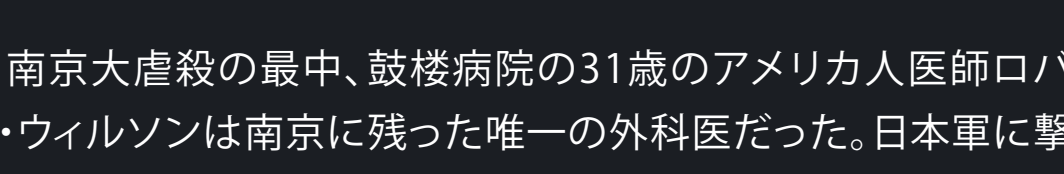
李書磊はスピーチの中で、追悼式典を行うのは、南京大虐殺での罪のない犠牲者と、日本侵略者に殺戮されたすべての同胞、そして中国人民抗日戦争の勝利のために命を捧げた各国の烈士に心より哀悼の意を表し、平和発展の道を歩む中国人民の揺るぎない崇高な願いを表明したいからだと述べた。李書磊は、歴史を銘記するのは突き進むためだと指摘した。

南京市の青少年代表87人が平和宣言を読み上げ、各界の代表6人が「平和の大鐘」を鳴らし、3000羽の平和の鳩が羽を広げて空へ飛び立つ、犠牲者に限りない哀悼の意を表し、世界平和への祈りを送った。

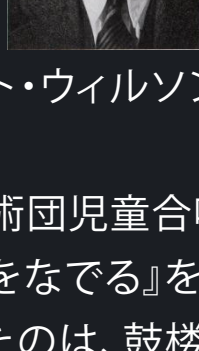


キャンドル祭

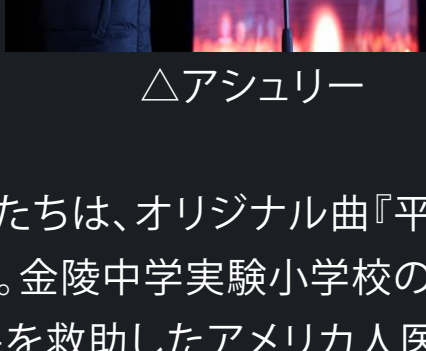
12月13日夜、当館の平和広場で「キャンドル祭——国際平和の集い」が開催された。南京大虐殺歴史記憶伝承者の代表者、安全区国際委員会の子孫の代表者、日本真宗大谷派平和法要訪中国、神戸南京結ぶ会らの友好団体の代表者、韓国籍の抗日戦争烈士の遺族代表者、華僑の代表者、留学生の代表者、紫金草ボランティアの代表者など、平和を愛する国内外の人々が手にキャンドルを持ち、共に故人を偲び、平和を祈った。



南京大虐殺の最中、鼓楼病院の31歳のアメリカ人医師ロバート・ウィルソンは南京に残った唯一の外科医だった。日本軍に撃たれた、刺された、レイプされた中国人難民を救うために昼夜を問わず手術をした。キャンドル祭に出席したウィルソン医師の曾孫・アシュリー・ジャコブソン (Ashleigh Jacobson) は「私たちがこのキャンドルに火を灯した時、歴史の重みを感じただけでなく、心の温かさも感じて、これは私の家族と南京の人々との間に、代々受け継がれてきた絆だと思う」と話した。

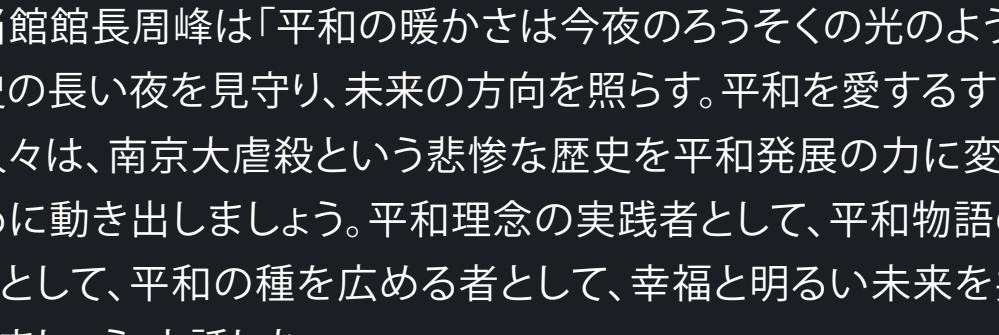


△ロバート・ウィルソン医師

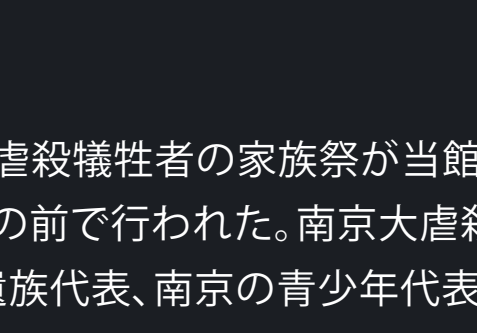


△アシュリー

紫金草芸術団児童合唱団の子供たちは、オリジナル曲『平和の風が紫金草をなでる』を初披露した。金陵中学実験小学校の生徒たちが歌ったのは、鼓楼病院で難民を救助したアメリカ人医師リチャード・ブレイディの曾孫娘であるメーガン・ブレイディが作曲した『Mercy』だ。歌詞に「この道は行った甲斐のある道だと信じて、進み続けてください、前途に光を見いだす……」と書いている。



当館館長周峰は「平和の暖かさは今夜のろうそくの光のように、歴史の長い夜を見守り、未来の方向を照らす。平和を愛するすべての人々は、南京大虐殺という悲惨な歴史を平和発展の力に変えるために動き出しましょう。平和理念の実践者として、平和物語の語り部として、平和の種を広める者として、幸福と明るい未来を共に作りましょう」と話した。



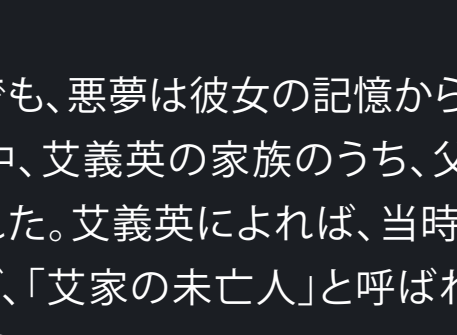
受け継ぐ

伝承者

12月1日、南京大虐殺犠牲者の家族祭が当館の「南京嘆きの壁」(犠牲者名簿の壁)の前で行われた。南京大虐殺の生存者、生存者の子孫、犠牲者の遺族代表、南京の青少年代表が壁の前で菊の花を手に、87年前に殺された愛する家族や同胞に哀悼の意を表した。

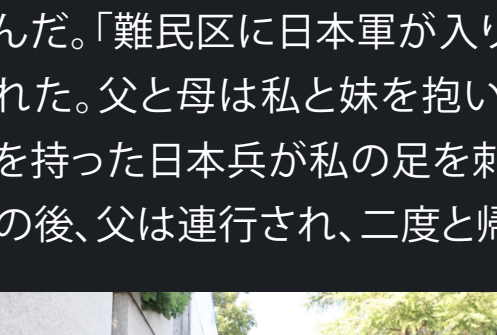
南京大虐殺生存者の劉民生(90歳)、夏淑琴(95歳)、艾義英(96歳)は、付き添いの親族と共に犠牲者の壁に向かった。彼らの後ろには、南京大虐殺歴史記憶伝承者の夏媛、黃興華、劉榴の姿があった。

髪が真っ白になった夏淑琴は、南京大虐殺における家族の不幸を思い出し、悲しそうな表情を浮かべた。孫娘の夏媛は、「家族全員にとって、犠牲者の壁はあの戦争で亡くなった愛する人たちに弔意を表する唯一の場所であり、私たちはこの歴史を決して忘れません」と語った。



△夏淑琴(真中)と娘(右一)、孫娘(右二)一緒に献花

87年経った今でも、悪夢は彼女の記憶から消されることがない。南京大虐殺の最中、艾義英の家族のうち、父親を含む6人の男性が日本軍に殺された。艾義英によれば、当時、シングルマザーとして生活苦にあえぎ、「艾家の未亡人」と呼ばれ、彼女の心をものすごく傷つけたという。



△艾義英(右二)と息子(真中)、孫(右一)一緒に献花

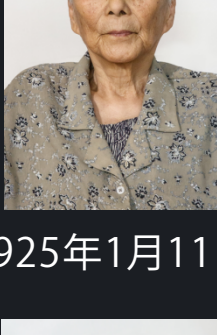
南京大虐殺の最中、劉民生は家族と共に金陵女子文理学院の難民区に逃げ込んだ。「難民区に日本軍が入り込んで、全員を室外に出させて並ばれた。父と母は私と妹を抱いて、寒いから私が泣いちゃって、銃剣を持った日本兵が私の足を刺した。右足に傷がまだ残っている。その後、父は連行され、二度と帰って来なかった。」



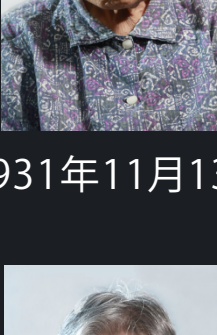
△劉民生と娘一緒に献花

お別れ

2024年に亡くなられた6人の南京大虐殺生存者



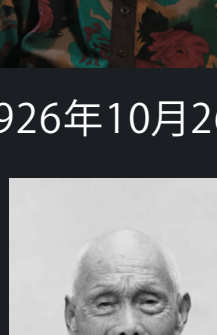
△程福宝 (1933年5月3日～2024年1月30日)



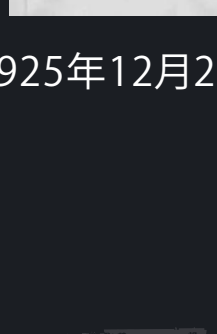
△陳桂香 (1925年1月11日～2024年3月5日)



△劉素珍 (1931年11月13日～2024年4月21日)



△高如琴 (1934年1月22日～2024年5月23日)



△石秀英 (1926年10月26日～2024年7月12日)



△周智林 (1925年12月23日-2024年7月20日)